別紙１

足助の暮らしを未来に繋いでいくために

—— 現代版 足助直し



豊田市
足助まちづくり推進協議会
株式会社つぎと

2026年3月

「足助直し」は足助に息づく知恵

古きを捨てずに　地域の暮らしや次の時代になじませる

歴史ある建物を直し　新しい命を吹き込み　足助の風景になじませる

私たちは　このまちの未来に繋いでいくために整えていく

※「足助直し」とは？
かつて足助の集まる塩の品質を整え、価値を高めて送り出した先人の知恵
これを現代の足助の暮らしを守っていくまちづくりのコンセプトとします

ー目次ー

第１章　はじめに
１　計画策定の背景・目的
（１）活用計画策定の背景・目的4−5

第２章　足助の概要
１　足助の地域概要
（１）人口・面積等7
（２）広域アクセス 8
（３）足助の町並み活用計画のエリア設定9
（４）地形・ランドスケープ10
（５）町並みにおける機能分布11

２　足助の歴史
（１）古代～中世13
（２）近世～近代14
（３）近代～現代15

第３章　足助の現状
１　足助の地域資源
（１）地域資源分布17
（２）重要伝統的建造物群保存地区「足助の町並み」18
（３）町並みに残る歴史的建造物19
（４）活用可能性のある歴史的建築物20
（５）自然景観・食文化21
（６）足助祭りとコミュニティ22
（７）まちづくりに関連したイベント23

２　足助の課題
（１）観光動向25-26
（２）人口動態27
（３）特徴と課題まとめ28

第４章　未来への設計図
１　町並み活用の方向性
（１）活用により目指す姿30
（２）活用の基本方針31-32
（３）活用コンセプト33

２　町並みの活用イメージ
（１）広域エリア活用イメージ35
（２）町並みエリア活用イメージ36
（３）地域が一体となった「足助直し」の取組37
（４）ハード整備のイメージ38
（５）ソフト整備のイメージ39
（６）活用推進イメージ40
（７）滞在イメージ41

第５章　具体的なアクション
１　事業イメージ
（１）事業者と空き家所有者とのマッチング43
（２）空き家・空き店舗の活用の促進44

２　施設の活用イメージ
（１）田口家住宅活用イメージ46

第１章　はじめに
１　計画策定の背景・目的

（1）活用計画策定の背景・目的



◆計画策定の背景

～なぜ今、この計画が必要なのか～

- **受け継がれてきた町並みの危機**

先祖代々守り抜いてきた歴史的な家々が多く残り、地域の努力により重要伝統的建造物群保存地区にも選定されましたが、今、足助の町並みでは少子高齢化と人口減少が急激に進んでいます。歴史的建造物の空き家・空き店舗が目立ち、その維持や管理が個人の力だけでは限界を迎えつつあります。

- **まちの賑わいの変化**

かつての足助のまちの賑わいは影を潜め、香嵐渓の紅葉シーズン以外は閑散としてます。商店の減少や生活の不便さが増す中で、足助のまち全体の活気をどう取り戻すかが問われています。

- **次世代への襷（たすき）を渡すことの困難さ**

足助祭りや伝統行事を支える若い世代が減り、私たちが大切にしている足助の暮らしを次へ繋いでいくことが難しくなっています。

（1）活用計画策定の背景・目的

◆計画策定の目的

～この計画が何を目指すのか～

本計画は、足助の町並みや地域資源の活用により、地域経済の活性化や担い手の創出を図り、**足助の暮らしを未来に繋いでいくこと**を目指しています。

本計画は、地域のみなさんと共有する『未来への設計図』です。
足助地区の現状の課題に向き合った上で、歴史を尊び、次世代へ確かな襷（たすき）をつなぐための道しるべとして、地域一体となって進めていきます。



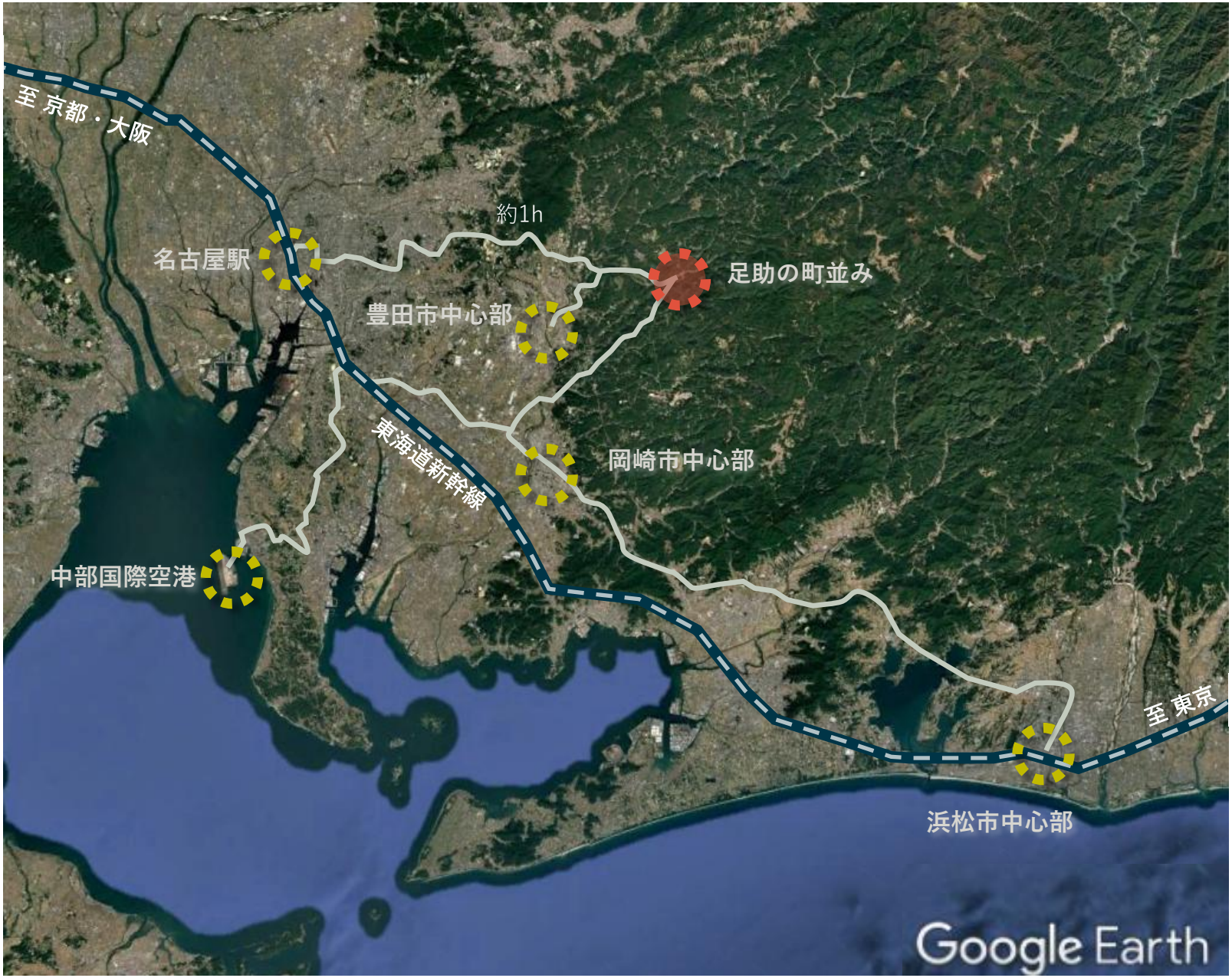
第２章　足助の概要
１　足助の地域概要

（1）人口・面積等

人口	豊田市　414,649人 （令和7年11月時点） 足助地区　6,557人 （　　〃　　） 旧足助町エリアを指す
面積	193.12　㎢
概要	旧足助町（現豊田市足助地域）は、昭和30年(1955)に１町３村の合併により誕生し、旧足助町は、平成17年(2005)に周辺５町村とともに豊田市へ編入した。区域の約87%を山林が占め、地区東部は寧比曽岳(標高1,120m)などの山々が続く一方、西端では標高80mとなる東高西低の地形。 14自治区77自治会からなり、小規模集落が山間に点在している。 ほとんどが山林であるため平地が少なく、工場などが立地する場所もなかったため、就業の場が少なく高度経済成長期に若年層を中心とした人口の流出が進んだ。昭和25年に比べ人口はほぼ半減し、高齢化が進む。 この地域は三河高原の一部をなし、足助川と巴川の合流地点の付近では河床からの高さが10～15m前後の河岸段丘面が発達している。また、北東の桑田和から追分付近にかけて幅100m程度の沖積谷底平野がみられる。 足助の町並みは、この段丘上に形成され、高低差のある路地など特徴的な景観をつくり出している。
地域資源の特徴	**都市圏からのアクセス** 名古屋市内、豊田市中心部から自動車で1時間圏内というアクセスの良さ。 **強固なコミュニティ** 200年以上続く足助祭りに代表されるように町内の結束が強固であり、外部からも祭りに参加する人も見られる。 **豊かな自然** 香嵐渓や飯盛山、巴川・足助川など山や川に囲まれており、暮らしの近くに豊かな自然が広がっている。
文化財及び天然記念物など	・重要伝統的建造物群保存地区　・足助八幡宮　・旧鈴木家住宅　・中馬館(旧稲橋銀行足助支店) ・足助八幡宮のイチョウ、スギ
課題	**少子高齢化と人口減少** 若年層の減少と高齢化の進行による地域コミュニティ活力の低下、祭りの担い手不足による存続の危機。 **空き家の増加** 空き家が増加し、商店の町並みから賑わいが失われている。伝建地区の町並みの維持が困難。

（2）広域アクセス

- 東海地域の玄関口である名古屋駅から車で約1時間、自動車産業の中核豊田市中心部から車で約30分の距離にあります。
- 地区内に鉄道は通っておらず、自家用車・レンタカー・バス等によるアクセスが中心です。



足助へのアクセス

車

名古屋駅	名古屋I.C.	1.0h	力石I.C.	足助
中部国際空港	セントレア東I.C.	1.0h	豊田松平I.C.	足助
豊田市		30min		足助
岡崎市	岡崎I.C.	45min	豊田松平I.C.	足助
浜松市	浜松I.C.	1.5h	豊田松平I.C.	足助

公共交通機関

名古屋駅	1.0h 鉄道	浄水/猿投/豊田市駅	1.0h バス	足助
中部国際空港	1.0h 鉄道	浄水/猿投/豊田市駅	1.0h バス	足助
岡崎駅	1.0h 鉄道	浄水/猿投/豊田市駅	1.0h バス	足助

新幹線

東　京	1.5h	名古屋駅
大　阪	1.0h	名古屋駅

（3）活用計画のエリア設定

- 足助地区の中心部、古くから街道沿いに町並みが発達した地区は、松栄町、宮町、西町、新町、本町、田町、親王町の7つの自治会で構成される。7町を合わせて足助自治区が構成されている。
- 西町、新町、本町、田町に特に歴史的な建物が多く残っており、足助重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。重伝建地区内には代々商売をしていた店舗に加え、銀行や郵便局などが、重伝建地区外の松栄町、宮町、親王町には病院やスーパー、ガソリンスタンドなどの暮らしを支える機能があります。
- 本計画ではこれらの足助自治区を足助地区の「生活拠点エリア」、足助重要伝統的建造物群保存地区を「足助の町並み」、「町並み」とし、町並みの南北に連なる小高い山々や、町並みを流れる川などを「足助の自然景観」、「自然エリア」と呼ぶこととします。



（4）地形・ランドスケープ

- 足助の町並みは、三河山地を形成する小高い山々に囲まれた河岸段丘沿いに発達した。かつては林業で栄え、山林や川と生活が密着していました。
- 昨今の山城ブームにより、足助城を盛り上げていく動きもみられます。
- 川沿いの地形は歩いて楽しむだけでなく、足助川での釣りや川遊びなど、自然を体感できる要素が揃っています。



足助町鳥瞰図

愛知県東部に広がる三河高原の一部をなす三河山地。
南北を黍生山、飯盛山、真弓山などの比高250～300m程度の山に囲まれ、真ん中を通る巴川、足助川の合流地点に河岸段丘が形成されている。
段丘沿いに発達した足助の町並みは山から川に向かう高低差のある斜面を横断するように形成され、各屋敷地の中でも勾配のある地形が生まれている。



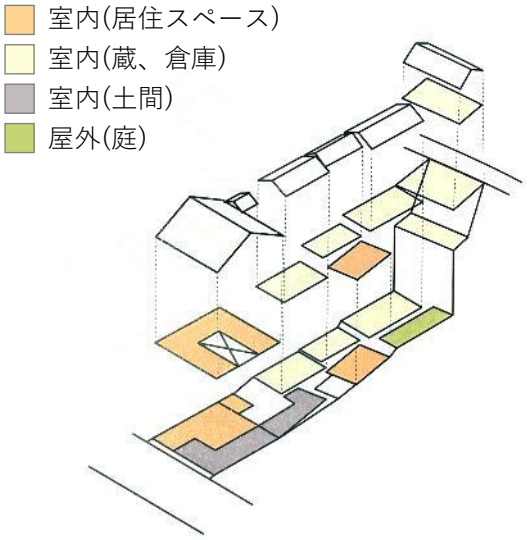
屋敷地断面図


観音山から見た町並み(昭和初期)
山に囲まれた平地に町並みが形成されていることが分かる


町並みから背後の山を臨む
身近に山を感じ、山とともにある生活


足助川沿いの景観
川岸に石垣が築かれ、石組階段で川まで降りることができる。


高低差を感じる小路
マンリン小路をはじめ、魅力的な小路が建物と建物の間を巡っている。

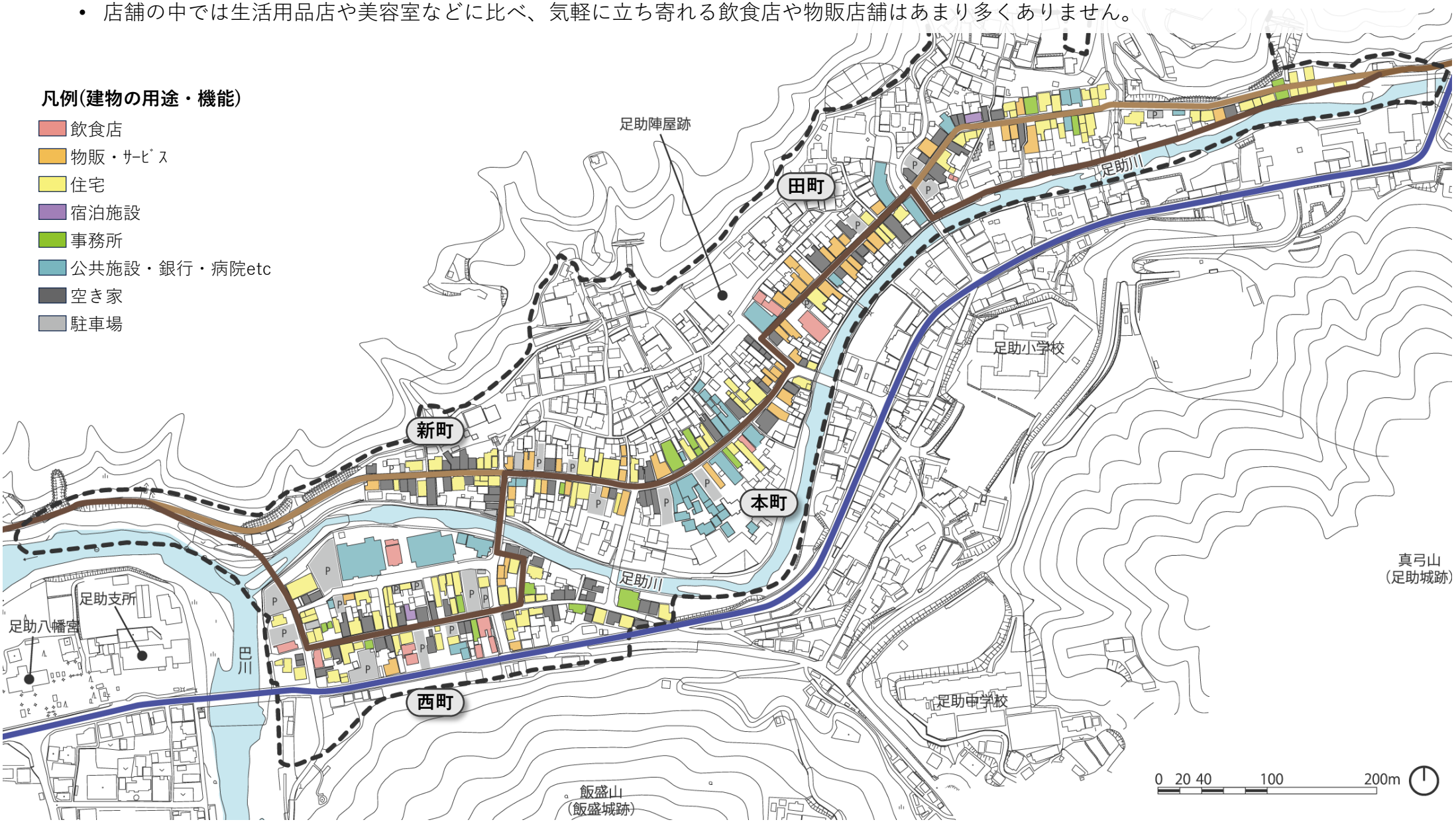


旧田口家住宅 敷地内高低差


本町に位置する田口家住宅は、敷地内を傾斜に合わせて5段に造成している。
主屋から裏の小屋まで4.8m近いレベル差があり、このレベル差を解消する敷地最奥の納屋はシタヤを伴った3層構成になっている。

（5）町並みにおける機能分布

- 街道沿いの建物の機能分布です。
- 西町・新町・本町・田町とも3割前後が住宅、2~3割が空き家となっているほか、物販店舗や駐車場が多くを占めています。
- 店舗の中では生活用品店や美容室などに比べ、気軽に立ち寄れる飲食店や物販店舗はあまり多くありません。



豊田市足助伝統的建造物群保存地区　概要パンフレット掲載地図により作成

第２章　足助の概要
２　足助の歴史

（1）古代～中世

原始時代

ー縄文時代から人の暮らしが営まれた地ー

足助には、縄文時代草創期には人が住んでいたことがわかる。足助地区における縄文遺跡の数は100か所近くに及び、狩猟・採集生活をする人々が1万年以上前から居住していた。縄文時代後期の土偶が出土した今朝平遺跡は愛知県の史跡に指定されており、貴重な歴史を伝えている。

一方、弥生時代になって水稲耕作が始まると、水田に適した平地や山麓部に生活の拠点が移り、人々は水田耕作に適さない山間部を捨てて平野部に降りて行ったと考えられる。足助地区て発見される弥生土器は弥生時代中期以降のものである。遺跡数は激減し、そのほとんどが、小河川の流域に位置する。古墳時代も同様である。



縄文遺跡分布図



弥生遺跡分布図

古代

ー足助氏の時代ー

奈良時代以降、貴族や大寺院が開墾して荘園を広げていくと、三河の各地も次第にそれぞれの荘園に組み入れられていった。12世紀になると、足助の地には美濃尾張源氏の山田氏が進出し、足助氏と呼ばれるようになった。足助氏は源氏や天皇家に使える者たちと婚姻関係を結び、足助は実質的な天皇家領として開発される場所となった。おそらくそうした流れの中で、足助の地にも足助荘が成立したものと考えられる。

足助氏初代の重長は黍生城に住み、2代重秀からは飯盛山城に移ったとされ、居館は現在の香積寺境内に構えられたと考えられる。足助氏が支配した時代の山城は「足助七城」などと呼ばれ、現在もその姿を留めている。



足助氏時代の足助七城配置図

中世

ー鈴木氏の時代ー

室町時代に入ると、三河鈴木氏の一流である足助鈴木氏が足助地方を支配した。足助鈴木氏は足助城（真弓山城)を本城として、八桑城、安代城、浅谷城、大沼城、阿須利城、田代城といった有力支城を配置した。足助城は、標高309ｍで巴川と足助川に挟まれた要害の地につくられているが、当時ようやく重要性の増大しつつあった信州街道を足助の町に入る手前で押さえることができ、城の南側下を通る設楽郡への街道をも押え得る重要な位置であった。

松平家忠の残した「家忠日記」からは、16世紀後半の足助において漆や綿の商取引が行われていたことがわかる。足助はもともと、太平洋岸と中部山岳地帯を結ぶ交通の要地であったが、この頃になると、現在の町並みの原型が形成されつつあったのかもしれない。

室町時代から戦国時代にかけては、松平氏、今川氏、武田氏などの周辺勢力に囲まれつつ、足助鈴木氏は離反帰服を繰り返しながら半独立の勢力を保ち続けたが、桶狭間の戦い(1560)以降に松平元康(のちの徳川家康)に攻め入られ、その後は松平家の家臣となった。そののち徳川家康の関東入国に従い、足助城は廃城となった。


復元された足助城(真弓山城)

（2）近世～近代

近世

ー街道の時代ー

江戸時代、足助は三河湾で作られた塩を信州に運ぶ「塩の道(伊那街道／中馬街道)」の中継地点として栄えた。矢作川を川舟で上り、古鼠や平古の川湊で荷揚げされた各地から届く重さや質が異なる塩を足助で荷ほどきし、品質を一定に整える塩ふみ、すなわち「足助直し」が行われた。坂が険しくなる山道に備えて約26kg(七貫目)ずつの俵に詰めなおされ、こうした作業によって「足助直し」「足助塩」と呼ばれた塩は高い信頼を得て、町並みには多くの物資や人が集まることとなった。街道の拠点として商品流通はますます盛んになり、宿場的要素に加えて商業の中心的性格が強くなっていく中で、次第に在郷町としての景観を整えるようになった。



中馬での輸送の様子

ー在郷町足助の発展ー

文化文政期(1804～30)になると、足助村及びその周辺の生産物を扱う新しい商人が台頭する。例えば鈴木利兵衛(紙)、小出権三郎(酒・味噌)などであり、彼らは三河湾沿岸の新田開発にも乗り出している。有力商人たちが、農民の生産物を商品化するとともに、農民の必要とするものを供給するなど、足助を中心とする経済圏を築きあげるようになると、それに比例するように軒数も増加し、文化文政期から明治期にかけて多くの町家が建てられ、町並みが形成された。



復元された主屋の鍛葺きの外観

ー大火からの復興と町並みの変遷ー

足助村は安永４年(1775)に大火に見舞われ、これにより町並みのほとんどが消失した。大火後に復興した町並みは漆喰塗り2階建ての町家で、防火を意識した瓦葺きが普及し、再建された旧鈴木家住宅をはじめ、現存する建物はこれ以降に建てられたものである。

江戸時代前期から大火頃までは概ね150～180軒の間で増減していた家屋の軒数が18世紀末頃に急増し、江戸時代後期には250軒を前後する規模となっている。また、明治３年(1870)の軒数は335軒とされる。

近代

ー東加茂地区の中心地ー

明治11年(1878) に東加茂郡役所が設置され、足助は西三河山間部の行政の中心地となった。飯田街道(旧伊那街道)は明治中期に新町の西と田町の東に新道が開かれると、新しい街道沿いに連続した町並みが形成され、新町・田町と一体となった。明治44年(1911)に国鉄中央線が全線開通すると、信州への物資輸送基地としての機能は次第に衰退した。しかし、東加茂郡での林業の発展や、養蚕業・生糸業・産馬の勃興、近隣での薪炭・竹等の資源価値の高揚などを背景として、それらの流通市場を集積するとともに金融の中心となり、在郷町としての性格をより強く保持しながら歩み続けることになった。また、明治後期の日露戦争以降には、こうした産業に関わる人で賑わう宿屋・飲食店・置屋などの歓楽街としての側面も持つこととなった。



大正期の大植樹の様子

ー香嵐渓の植樹ー

香嵐渓の紅葉は、江戸時代に香積寺の三栄和尚が参拝客を楽しませようと、お経を唱えながら1本1本モミジを植えたのが始まりとされている。その後大正13年(1924)に当時の町長や地元の青年団が、産業や特産品のなかった足助を紅葉の名所にしようと寄付金を集め、およそ1,000本のモミジを植える「大植樹」を行った。その後も植樹は続けられ、現在の香嵐渓が形作られている。

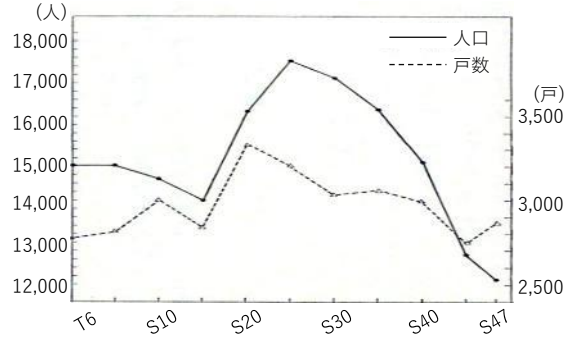
（3）近代～現代

近代

ー昭和初期~太平洋戦争ー

大正末期から始まった不景気は昭和に入ると深刻さを増し、農業恐慌によりさらなる打撃を受けた。このころの足助の主な産業は養蚕や炭焼きであり、平地が少ないため農業はあまり振るわなかった。昭和５年(1930)には、それまで足助の町並みを通過していた国道153号(飯田街道）が足助川左岸に付け替えられて、結果的に町並みが残ることとなった。太平洋戦争が近づくと軍需産業が盛んになり、養蚕業も下火となりつつあったが、決戦下のガソリン代用木炭や空襲で焼失した都市の復興需要などにより林業の生産割合が増加していった。

終戦後、昭和30年(1955)頃までは林業の発展が続いたが、石油や電気などへエネルギーが変わったことや外国から安い木材が輸入されるようになったことで衰退していった。また高度経済成長期下に急激に発展した豊田工業地域の労働市場の拡大に伴い豊田市方面へ働きに行く人や離村する人が増え、昭和45年(1970)には過疎地域に指定された。



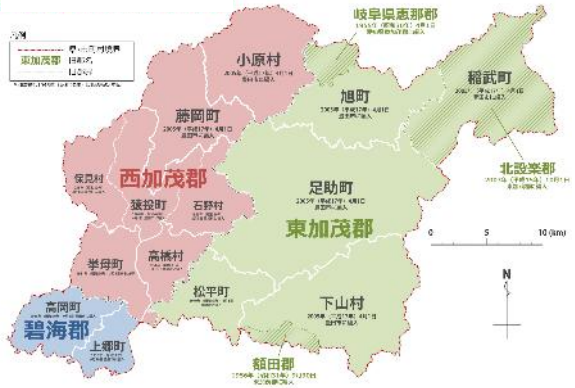
昭和期の人口推移

現代

ー市町村合併ー

明治初年には足助地区に93か村が存在していた。この数多い村々が、明治8年(1875)の地租改正、その後の町村再編成などにより、明治39年(1906)に東加茂郡足助町、盛岡村、賀茂村、阿摺村の1町3村が成立した。その後、昭和30年(1955)にはこれら4町村が合併して足助町となった。

昭和45年に過疎地域に指定された後も人口減少が進み、平成の大合併を背景として、足助町は2005年に藤岡町・小原村・旭町・稲武町・下山村と共に豊田市へ編入された。



ー足助のまちづくりー

都市化や工業化が進行し、次第にまちが衰退していく中、香嵐渓や歴史的な町並みを守り、独自性を発信することがこれからの足助が歩むべき道である、という意識が一部の住民に芽生えていった。

1975 年に「足助の町並みを守る会」が発足し、この会が中心となって**1978 年**の第１回全国町並みゼミが開催された(名古屋市有松との共催)。



1980年には当時の町役場観光係長小澤庄一氏により、香嵐渓のなかに三州足助屋敷が建設された。足助町における伝統技術の継承と地域雇用の創造をめざした生きた民俗資料館であり、「人間性創造のための文化型観光」と位置付けられた。足助屋敷は初年度から観光客でにぎわい、現在も香嵐渓と合わせて観光の名所となっている。

1990年、福祉と観光の融合という考えのもと福祉センター百年草がオープン。都市と山村の交流、若者と高齢者の交流、健常者と障がい者の交流など、今日まで幅広い年齢層や立場の人々が集える場となる施設運営をめざし、高齢者雇用の場ともなっている。

その後地域のまちづくりグループとしてAsuke Tourism 21世紀倶楽部(通称AT21)が発足し、この地に伝わる土びなや各家に眠っていたおひなさんを軒先に並べる「中馬のおひなさん」(**1999～**)や、陶器の灯火器「たんころりん」に、和紙を貼った竹篭を被せ、柔らかな光で美しい夏の夜を演出する「たんころりんの夕涼み」(**2002～**)というイベントを実施している。たんころりんの竹籠づくりに若い人たちが関わったり、隣接地域から観光客が集まるような季節の行事となっている。



2011年には足助の町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定された。街道沿いの短冊状の敷地に平入・妻入の主屋が間口いっぱいに建ち並んで、背後には付属屋、土蔵などが配置されている。足助川沿いには、石垣を築き、川に張り出すようにして座敷などが建てられ、独特の景観をつくり出しているとして評価された。

第３章　足助の現状
１　足助の地域資源

（1）地域資源分布

多様な宝による、足助にしかない重層的な魅力

足助には、江戸時代から続く町家だけでなく、四季を彩る香嵐渓の自然、そして受け継がれてきた祭礼文化など、多様な資源が今も息づいています。 このマップは足助の重層的な魅力を示しています。

歴史的な建物のほか、町並みでは足助祭りや中馬のおひなさん、たんころりんの夕涼みなど季節によって様々なイベントが行われています。

また、重伝建地区の周囲には香嵐渓や足助城などの気軽に散策できる自然が広がり、足助屋敷や百年草などの観光拠点もあります。



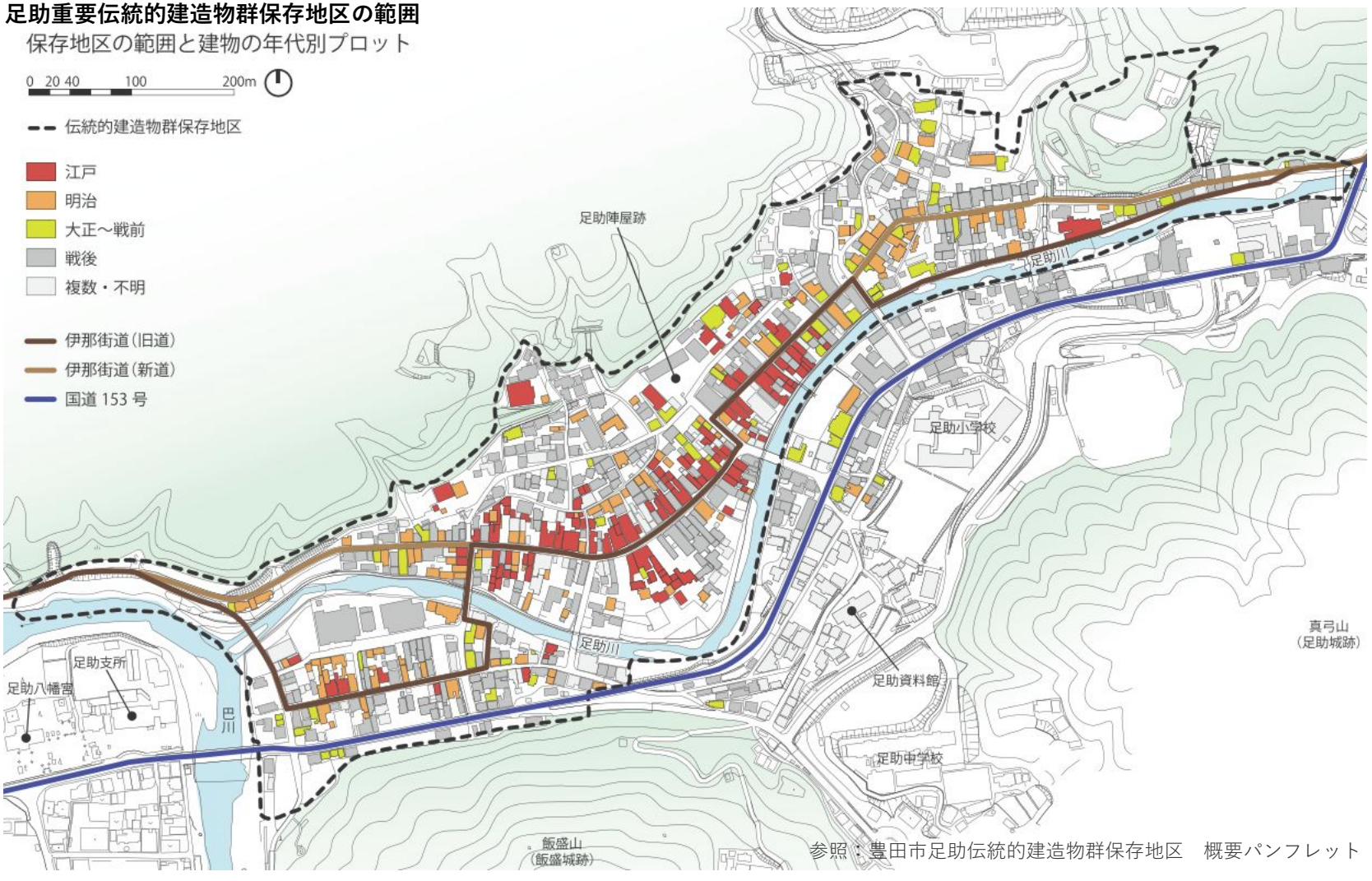
（2）重要伝統的建造物群保存地区「足助の町並み」

重伝建を守ることは、足助の価値を発信していくこと

商家、寺院、細い路地、足助川、そして背後の山並み。これらが一体となって作り出す景観は、重伝建地区の中でも、足助にしかない独特の風情を創り出しています。この景観を守ることは、足助の価値を世界へ発信していく土台となります。

- 昭和50年(1975)頃から町並み保存運動がおこり、平成23年(2011)に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。
- 伊那街道の重要な中継地点として栄え、江戸時代から昭和前期までの町家が密度高く並んでいます。街道沿いの短冊状の敷地に平入・妻入の町家が建ち並び、足助川沿いには石垣が築かれて川に張り出すようにして座敷などが建てられ、独特の景観をつくり出しています。

足助重要伝統的建造物群保存地区の範囲



参照：豊田市足助伝統的建造物群保存地区　概要パンフレット



妻入・平入の町家が立ち並ぶ





電線地中化および道路修景

（3）町並みに残る歴史的建造物

文化財や代表的な屋敷

足助の町並みを構成する歴史的建造物は、特定の時代ではなく江戸時代～昭和初期頃まで様々であり、時代ごとの特徴がみられることが魅力であります。街道に沿って間口を構え、山から川にかけて奥行きのある敷地割の中に建物が配置されており、地形を感じる小路や川沿いの景観など、ランドスケープと一体となって楽しむことができます。

旧鈴木家住宅(紙屋)　国指定重要文化財

旧鈴木家住宅は、足助の歴史的な町並みのほぼ中央に位置し、地区内で屈指の規模を誇る町屋である。屋号は紙屋といい、元々は紙を扱っていたが、味噌や漆などの取引や新田経営にもかかわっていた。約4,000平方メートルの土地に江戸時代中期から大正期の建物が16棟建ち、平成25年(2013)に重要文化財に指定されている。

安永の大火の翌年に主屋が建築された。南に隣接し大火を免れた仏間座敷は宝暦7年(1758)の建築で、今日の足助の町並みにおいては最も古い建物となる可能性がある。その他、文化14年(1817)に本座敷、明治29年(1896)に新座敷を建築している。



中馬館(旧稲橋銀行足助支店)　県指定文化財

大正元年(1912)年に旧稲橋銀行足助支店社屋として建てられた。木造２階建、塗屋造、切妻、桟瓦葺、平入、１階外壁両側の袖壁は前に大きく張り出して下屋上部まで高く掲げられ、防火設備として機能していたようだ。明治～大正期にかけての地方銀行の面影をよく残している。昭和52年(1977)に取り壊しの計画が持ち上がったが、町並みの大事な顔であるということから、「足助の町並を守る会」の有志が取り壊しの延期を求め、その後、町が取得した。昭和59年(1984)に愛知県指定有形文化財となっている。

昭和57年(1982)に中馬館として開館し、小さな資料館であるが、商業・金融・交通・町並みなどの資料が展示されている。



旧田口家住宅

田口家は屋号を「萬屋」といい、屋号が示すように様々な品を扱う商家であった。江戸～明治の中頃までは製茶業を営んでおり、その後、製茶業を営みながら菜種油・金物・肥料・石油などの販売を手掛けていた。

大正期中頃になると、物資の輸送などが馬を使ったものから自動車に移り変わるのを受け、時代の最先端をいく製油・ガソリンを扱うようになる。当時の足助は、製材・薪炭などの林産物の流通の拠点、さらには金融の中心として発展した。

旧田口家住宅には、製茶業や給油所を営んでいた当時に使用されていた看板やガソリンの地下タンクなどが現在も良好な状態で保存されており、これらは旧田口家住宅の歴史を伝えるものとして貴重な資料である。



小出家住宅

明治の新道が開通する以前、かつての伊那街道は田町を過ぎると現在の真弓橋のあたりで足助川右岸へ下り、今朝平まで川沿いを北進していた。小出家住宅はこの街道旧路沿い、観音寺山西の谷筋からの流路と足助川との合流地点の上流に位置する。

酒造や味噌の醸造、塩や木綿などの流通で資本を蓄積し、矢作川河口の新田開発も行ったという。代々足助の大庄屋を勤め、紙屋鈴木家とともに町の政治経済の中心を担っていた。

田町以西にみられる街道沿いの短冊形の敷地割りとは異なり、間口の広い斜面地に段状に建物群が建つ屋敷構えが一式残っており、近世における最上層の商人の屋敷構えと江戸時代後期から近代にかけての施設の充実をよく伝えて貴重である。



（5）自然景観・食文化

秋以外も自然や山村を楽しめるフィールドの存在

香嵐渓の紅葉が有名ですが、この他にも豊かな自然景観があります。５月新緑の時期も美しい香嵐渓、町並みを流れる足助川、巴川では昔から鮎釣りが盛んでした。今でも、地域漁協組合により鮎釣りのイベントが行われています。また、周辺の山で捕れるシカやイノシシなどのジビエを楽しむ食文化もあります。大多賀地区につながる起伏のある地形は自然を楽しむサイクルツーリズムのコースにもなっています。



香嵐渓の新緑



足助城跡(真弓山)



足助川



足助川、巴川の鮎やうなぎ



周辺の山で捕れるジビエ



サイクルツーリズム

（6）足助祭りとコミュニティ

町の賑わいを支えてきたのは、世代を超えて受け継がれるコミュニティの力

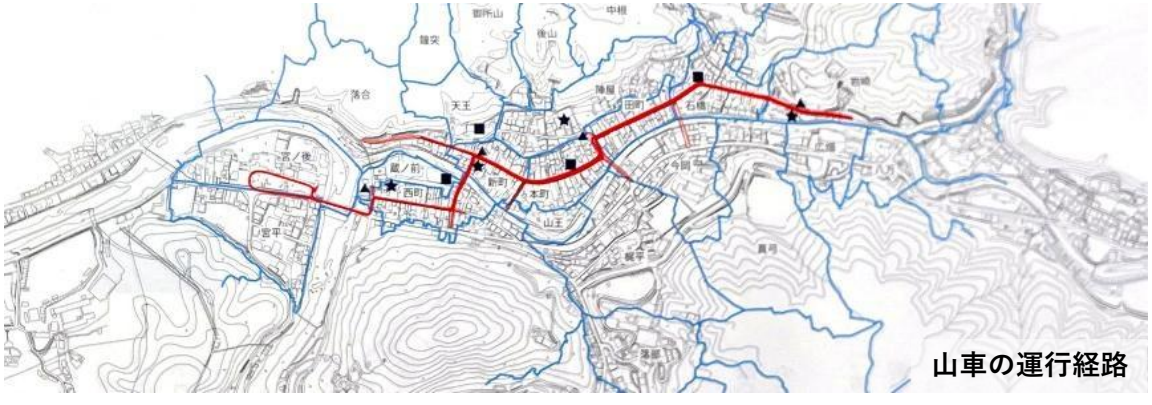
足助まつりに象徴される強固なコミュニティは、この町の誇りであり、暮らしを支える土台となってきました。しかし今、少子高齢化やライフスタイルの変化により、伝統を次世代へ繋ぐことが少しづつ難しくなっています。コミュニティの揺らぎは、単なる担い手不足ではなく、足助らしい助け合いの文化そのものが途切れてしまう懸念をはらんでいます。

足助祭り

足助祭りは足助八幡宮(白鳳２年創建)のお祭りで、新町に残る記録より1700年代中頃以前より現在に近いの形のお祭りが行われていたと言われている。
西町、新町、本町、田町ごとに山車を持ち、４台が町内を引き回される。
かつては5日間かけて行われていたが、現在は2日間に縮まり、毎年10月の土日に行われている。土曜日を試楽祭、日曜日を本楽祭と呼び、山車は試楽祭の日に組み立てられる。夜には御神輿渡行もあり、町内を御輿が巡行する。
本楽祭には、山車が八幡宮の境内を１周する「引き回し」のあと、在方と呼ばれる周辺地域より警固の鉄砲隊が登場し、空砲撃ちを披露する。
夜には祭りのハイライトである「梵天投げ」があり、山車から高くのびた竹竿の先端を飾っていた梵天を各町の若い衆代表である「年行司」がそれぞれの祝詞をあげ、八幡宮の神前で投げる。
町内では、家内安全等のお守りとして誰もが欲しがり、大盛り上がりを見せる。

祭りによるコミュニティ

祭りの準備は約1か月前から始まり、お囃子の練習などが夜な夜な行われる。
一度足助を離れた人も祭りの日には地元に戻り、山車の曳き手となったり、役についたりするという。
祭りによる各町ごとのコミュニティに魅力を感じ、仕事や旅行で足助を訪れたあと、地域の一員のように祭りに参加する人もいる。
一方で、少子高齢化により祭りの担い手不足により存続の危機も懸念されている。



山車の運行経路



（7）まちづくりに関連したイベント

次世代へタスキを繋ぐイベントなどの交流

伝統的な足助まつりを守り抜く一方で、町では多様な主体によるまちおこしの活動が行われてきました。そして、少しずつ新たな取り組みの芽も生まれています。これらは、単なるイベントではなく、住民や来訪者が混ざり合い、これからの足助の担い手を育む交流の土台となっています。

■これまでのまちのイベント

中馬のおひなさん

中馬のおひなさんとは、足助の町並みの民家や商家に古くから伝わるおひなさんや土びな(土人形)を玄関先や店内に華やかに飾り、道行く人々に町並み散策を楽しんでもらおうと始まった足助のイベントのひとつである。
平成11年(1999)から地域活性化を目的にAsuke Tourism 21世紀倶楽部(通称AT21)によって始まった。
地域のランドマークである足助八幡宮近辺から紅葉の名所である香嵐渓や、旧街道沿い130軒以上の商店や民家、地元の交流館など約2キロに渡り土びなや内裏びな、人間の大きさほどもある土人形などを展示している。当初は3,000人程と言われていた観光客は年々増え、今では70,000人以上が訪れる。



イベントは約1ヶ月間続くが、その間、地元高校生のダンスパフォーマンス、中学生のブラスバンド、小学生以下対象の「がんどう」と言われるお菓子配りイベント、スタンプラリー、土人形の絵付け体験など様々なイベントが行われる。





たんころりんの夕涼み

足助の夏の風物詩であり、毎年夏至前後と8月上旬からお盆にかけて行われている。
陶器の灯火器「たんころりん」に、和紙を貼った竹かごを被せたものであり、竹かごのすき間から漏れ出る柔らかな光で美しい夏の夜を演出する。
平成14年(2002)から地域の有志によって始められたものであるが、徐々に広まって今では地域に根付いた一大イベントとなっている。たんころりんの会が中心となって、地域住民、ボランティアの方とともに、夏が近づくと竹かごづくりやイベントの設営を行う。



足助川万灯まつりと合わせて、周辺地域からも観光客が訪れ、大変なにぎわいを見せる。
たんころりんがスタートして15年目を迎えてからは、竹灯りも加わり、陣屋跡に竹灯りを灯すキャンドルナイトが始まった。
若手を中心に集まったメンバーで、土日を使って竹灯りを制作している。



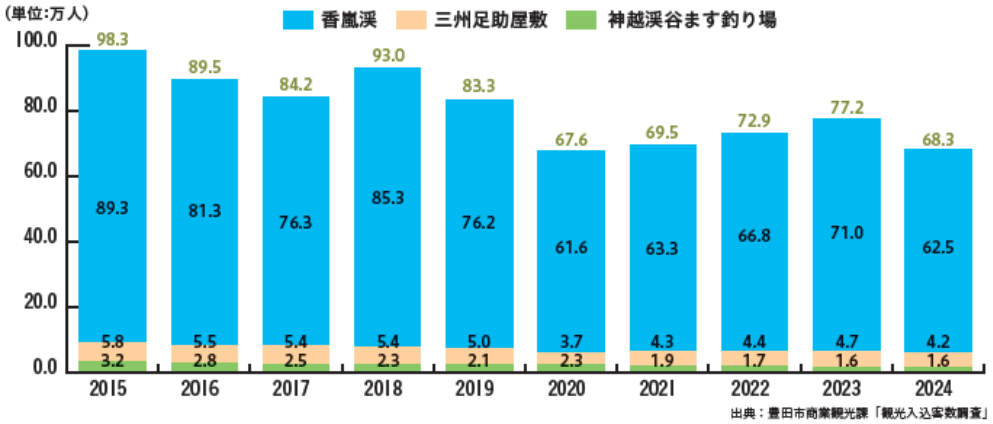


第３章　足助の現状
２　足助の課題

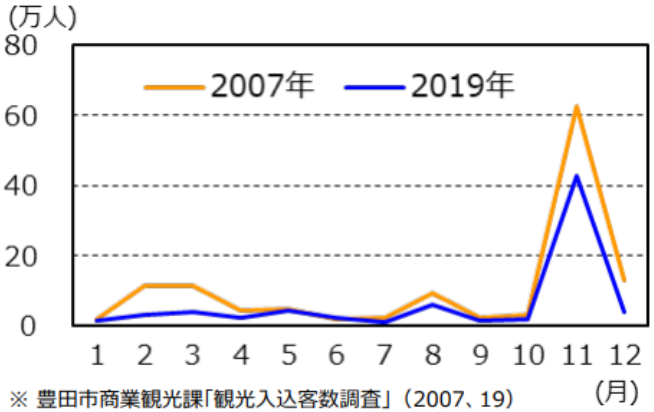
（1）観光動向

- 豊田市による入込客数データより、香嵐渓は紅葉祭りが行われる11月だけで40万人を記録し、年間を通して60万人を超える観光客が訪れています。
- 足助の町並みはこれまで観光地として認知されておらず、観光にまつわるデータ取得がほとんど行われていません。

香嵐渓・三州足助屋敷の入込客数の推移



香嵐渓月別観光入込客数の比較



※ 豊田市商業観光課「観光入込客数調査」(2007、19)

中馬館 入込客数



中馬館入込客数の推移より

中馬館は大正元年に稲橋銀行足助支店として建てられた建物で、閉館となったあと、昭和57年より「中馬館」として主に足助の証行・金融・交通・町並みの資料を展示している。
運営開始後、来館者数は平成10年頃までは横ばいを続けるが、平成11年に町並みで「中馬のおひなさん」が始まると、2~3月の入込客数が一気に増加した。

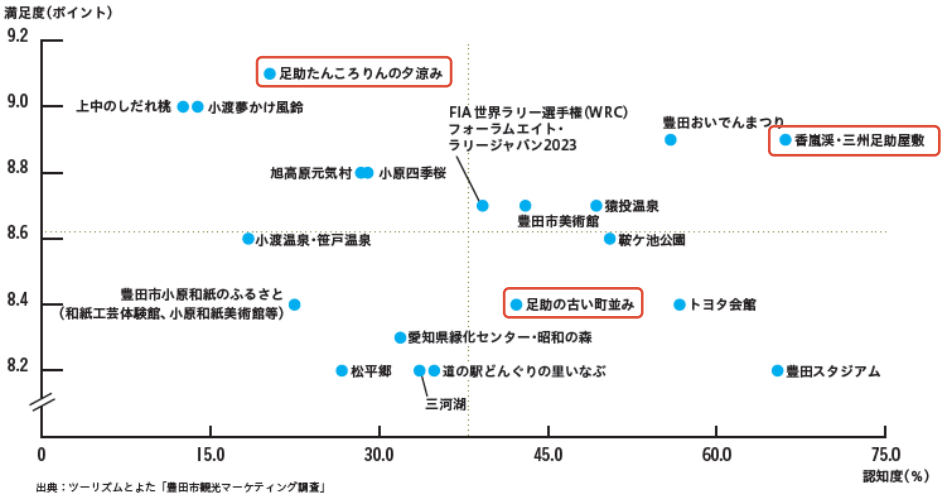
令和3年からは旧田口家住宅、令和5年からは旧鈴木家住宅の部分公開が始まり、11月を中心に旧田口家は年間10,000人前後、旧鈴木家は約20,000人が訪れている。

※ツーリズムとよたによる調査結果・中馬館入込客数データにより作成

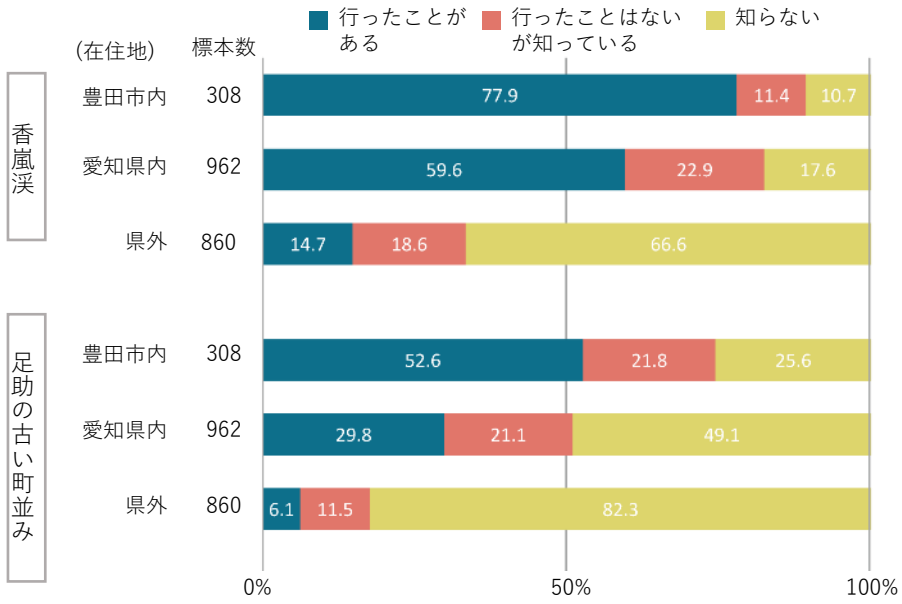
（1）観光動向

- 香嵐渓を訪れた観光客を対象としたアンケート調査によると、香嵐渓・三州足助屋敷は来訪者の認知度、満足度ともに高い水準にあるが、足助の古い町並みはいずれも劣ることが分かります。
- 香嵐渓、古い町並みとも県外在住者からの認知度が特に低く、滞在拠点の整備やＰＲが課題です。

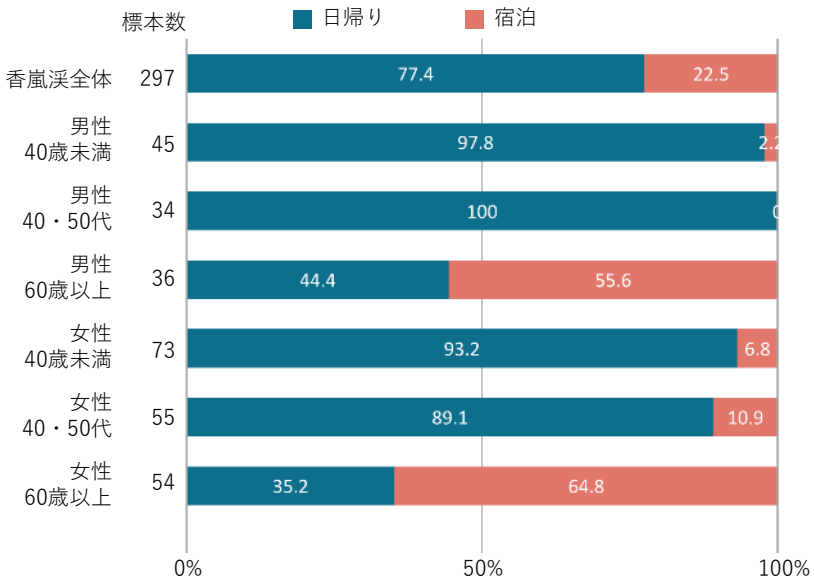
豊田市観光地の認知度と満足度（2019-2023統合）



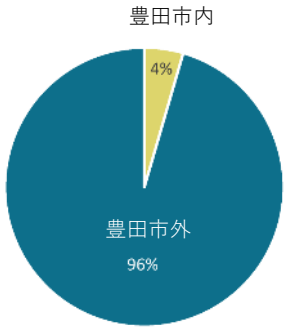
在住地別の認知・来訪経験(R6年インターネット調査)



香嵐渓を訪れる人の宿泊状況(R6年対面調査)



うち宿泊先

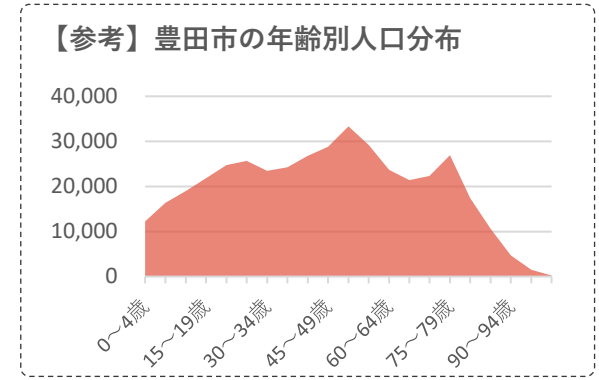


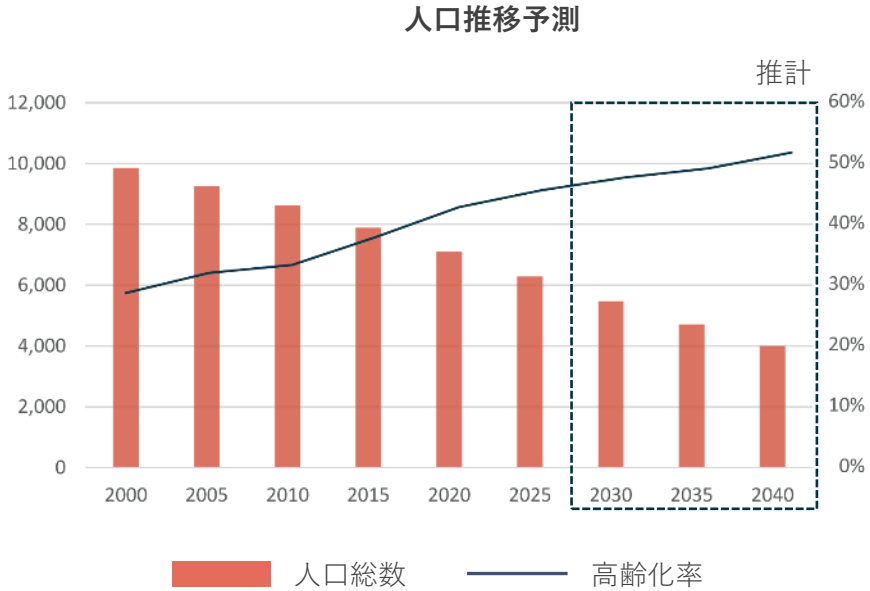
11月には毎年香嵐渓をライトアップするもみじまつりが開催され、県内外から多くの人が訪れます。
しかしほとんどが日帰り客であり、宿泊を伴う観光客も足助では宿泊せず、名古屋など豊田市外の他の観光地に移動していると考えられます。

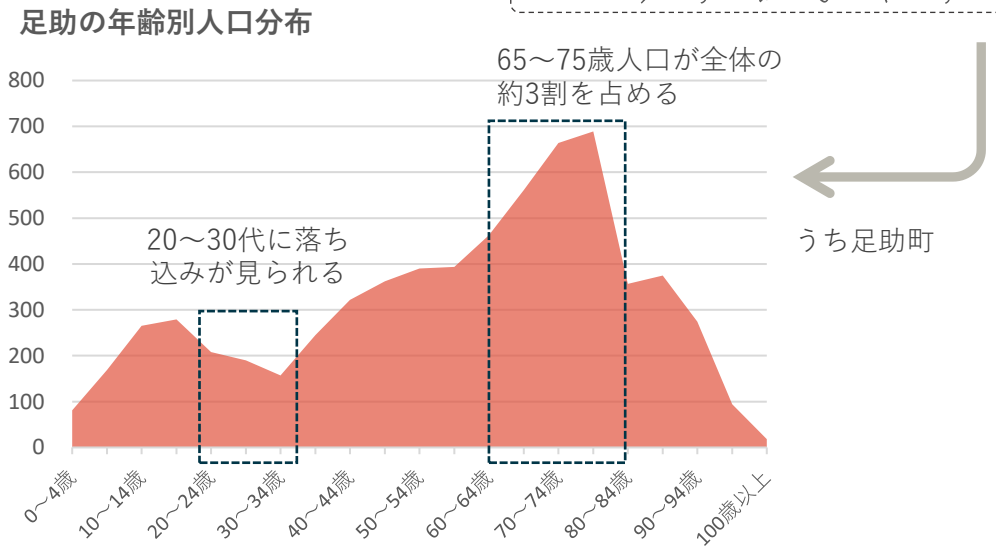
※ツーリズムとよたによる調査結果より作成

（2）人口動態

- 昭和45年(1970)に過疎地認定されてから人口は減少の一途を辿っています。
- 65歳以上高齢化率は令和7年時点で約45％であり、日本全体の高齢化率29.3％より高くなっています。今後も少子高齢化が加速し、行政サービスの低下など、生活の維持が困難になることが予想されます。







国勢調査を基にコーホート変化率法を用いて推計したものを示します。
このまま減少が続くと15年後の2040年には人口4,000人、高齢化率は50％を超えると予想され、限界集落として医療や介護の面で様々な問題が生じると予測されます。

人口分布より、特に20～30代の働き盛りの世代に人口の落ち込みが見られ、若い世代への就業先の提供や、足助に住みながら近隣都市で働くイメージを持ってもらうことが重要です。

年齢	人数	構成比	年齢	人数	構成比
0～4歳	81	1.2%	55～59歳	394	6.0%
5～9歳	169	2.6%	60～64歳	463	7.1%
10～14歳	265	4.0%	65～69歳	561	8.6%
15～19歳	279	4.3%	70～74歳	664	10.1%
20～24歳	208	3.2%	75～79歳	689	10.5%
25～29歳	190	2.9%	80～84歳	357	5.4%
30～34歳	157	2.4%	85～89歳	375	5.7%
35～39歳	245	3.7%	90～94歳	274	4.2%
40～44歳	322	4.9%	95～99歳	94	1.4%
45～49歳	362	5.5%	100歳～	18	0.3%
50～54歳	390	5.9%			
			合　計	6,557	

※国勢調査により作成

（3）特徴と課題まとめ

町並みだけでなく自然や歴史などの地域資源に富む一方、人口減少・少子高齢化の進行は止まらず、現在の強みである町並みやコミュニティの維持が今後ますます困難になることが予想されます。
足助の特徴や強みが生かし切れておらず、足助を楽しみつくす仕組みづくりが重要です。

足助の特徴・強み

立地的な優位性
車で名古屋から1時間、豊田市中心部から30分という恵まれた立地



豊かな自然資源
香嵐渓や飯盛山、足助川・巴川などの自然が身近にあり、町並みから日常的にアクセスできる



まつりでつながるコミュニティ
江戸時代から続く足助まつりなど、地域のコミュニティが強固に根付いている



歴史的な町並み
江戸時代からの建物が残る町並みは商家町の趣を今に伝え、伝建地区に選定されている。



足助の課題

地域資源が生かされていない
紅葉の時期の香嵐渓は有名だが、他の季節の魅力が知られていない。
まちの年長者たちが遊んでいたような川や山での楽しみ方が分からない。



家業・生業が継がれない
少子高齢化、人口減少により跡取りや担い手が不足し、存続の危機にさらされている



空き家が有効活用されない
空き家が増加し、除却される建物が出るなど町並みの維持が困難になっている。
かつての商家町のにぎわいが失われている。



認知度の低さ
秋には観光客でにぎわう香嵐渓に対し、町並みの認知度が低く魅力を知られていない。



第４章　未来への設計図
１　町並み活用の方向性

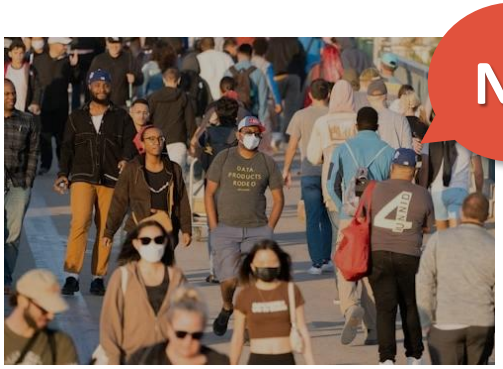
（1）活用による将来像

観光地として成功することを目指すのではありません。私たちが目指すのは、

暮らしている人が誇りを持ち続け、訪れる人が足助の暮らしに共感する

いつまでも人の営みが続いていく足助の未来です。

- 足助の町並みの特徴は、江戸時代から商家町として商売と人の暮らしが連綿と続いてきたことにあります。
- 商売をやめても建物の奥には生活の場が残るため、街道沿いだけをテナント貸しする仕組みづくりや、単にテナントを誘致するだけではなく、職住近接のライフスタイルを求める事業者を取り込むことが求められます。
- 香嵐渓の観光客を町並みに引き込み、観光地としてにぎわいが生まれても、足助まつりなど住民のつながりによって形成されているコミュニティの活性化の解決策にはなりません。
- 住民の生活を支え、同時に外部からの観光客も楽しめるにぎわい機能を創出することで認知度を上げ、将来的な足助暮らしへの関心を高めていきます。



観光地化によるオーバーツーリズムや、写真映えを重視した店舗ばかりが町並みにあふれるのを避ける

将来像を実現する３つのステップ

Step 1

「賑わい」を創る

香嵐渓の一時的な混雑を町並みへと緩やかに繋げ、年間を通じて人の気配が絶えない日常の賑わいを創ります。

【具体策】

空き家・空き店舗を現代ニーズに合った店舗などとして再生

Step 2

「仕組み」を整える

個人任せにするのではなく、地域・民間・行政が連携し、町並みを面的に支え、守り続ける体制を創出します。

【具体策】

歴史的建造物を守り、盛り上げ、次世代へ引き継ぐための継続的な運営モデルの構築

Step 3

「暮らし」を育む

新たな賑わいが仕事を生み、それが若者や移住者の定住へとつながる選ばれる町を目指します。

【具体策】

移住・起業支援と地域コミュニティ（まつり等）への参画を促す環境づくり

（2）活用の基本方針

素晴らしい町並みや足助祭りを残したい。その想いは共通ですが、今のままでは限界があることも事実です。
これからは、これまでの「保存する」という守り方に「活用する」という攻めの姿勢をプラスする必要があります。
足助の歴史をただ保存するだけでなく、現代の暮らしになじませて、次世代が愛着を持って住み続けられるまちを目指します。

理想を現実に変えるための発想の転換

これまでの視点

- 建物は使っておらず空き家状態だが、残さないといけない
- 観光客は秋に来るから、秋に頑張ろう
- まつりの担い手不足を痛感しているが、足助内の人で、まだどうにかなるだろう

これからの視点

- 歴史的な建物を残すだけでなく、活かすことで守る
- 一時期だけの点から、1年中、１日中楽しめる面の賑わいへ
- 足助だけから、外の仲間と共にへのつながりを

（2）活用の基本方針

将来像を実現するための、取組の3つの柱

柱1

歴史的建造物の動態保存と生きた活用

単なる保存（静態保存）ではなく、宿泊施設や店舗として使いながら守る（動態保存）を推進します。
建物のミセ部分は商業利用し、
奥を住居とする足助伝統の職住
一体の形式を現代的に実現します。

▶「建物」を直す



柱2

日常の賑わいと滞在型観光の創出

11月の紅葉頼みの観光から脱却し、滞在型コンテンツ（宿泊・体験など）を整備することで、年間を通じた経済循環を創出します。
住民が利用する商店と観光客向けの店舗が共存する足助の風景を魅力化します。

▶「すごし方」を直す

足助の暮らしを未来へつなぐ
▶「足助直し」※

柱3

新しい担い手と地域の共生

空き家・空き店舗をリノベーションして創業支援や移住促進の拠点とし、足助のコミュニティに魅力を感じる外部人材を積極的に呼び込みます。古くからの住民と新たな担い手が共にまちを育てる体制を創ります。

▶「つながり」を直す

※「足助直し」とは？
かつて、足助の集まる塩の品質を整え、価値を高めて送り出した先人の知恵。
これを現代の足助の暮らしを守っていくまちづくりのコンセプトとします。

歴史や暮らしを大切に、新しい価値を生み出す
「足助直し」　-Update & Heritage -

足助の人々は知恵と工夫を凝らしてきました
遠くから運ばれてきた塩を混ぜ合わせ　より良いものへと仕立て直す
先人たちが育んだ「足助直し」の精神です
単に古いものを直すという意味ではありません
時代や環境が移り変わる中で　守りたい足助の文化を揺るがすことなく
新しい価値や多様な知恵を加えて　未来へとつないでいくことです
私たちは　この古くて新しい「足助直し」をまちづくりのコンセプトとします。

古い空き家を　新しい息吹を吹き込む場所へ
歴史ある手仕事を　新しい形で発信する機会へ
この地に暮らす人と訪れる旅人　それぞれの個性を響かせ合う場へ

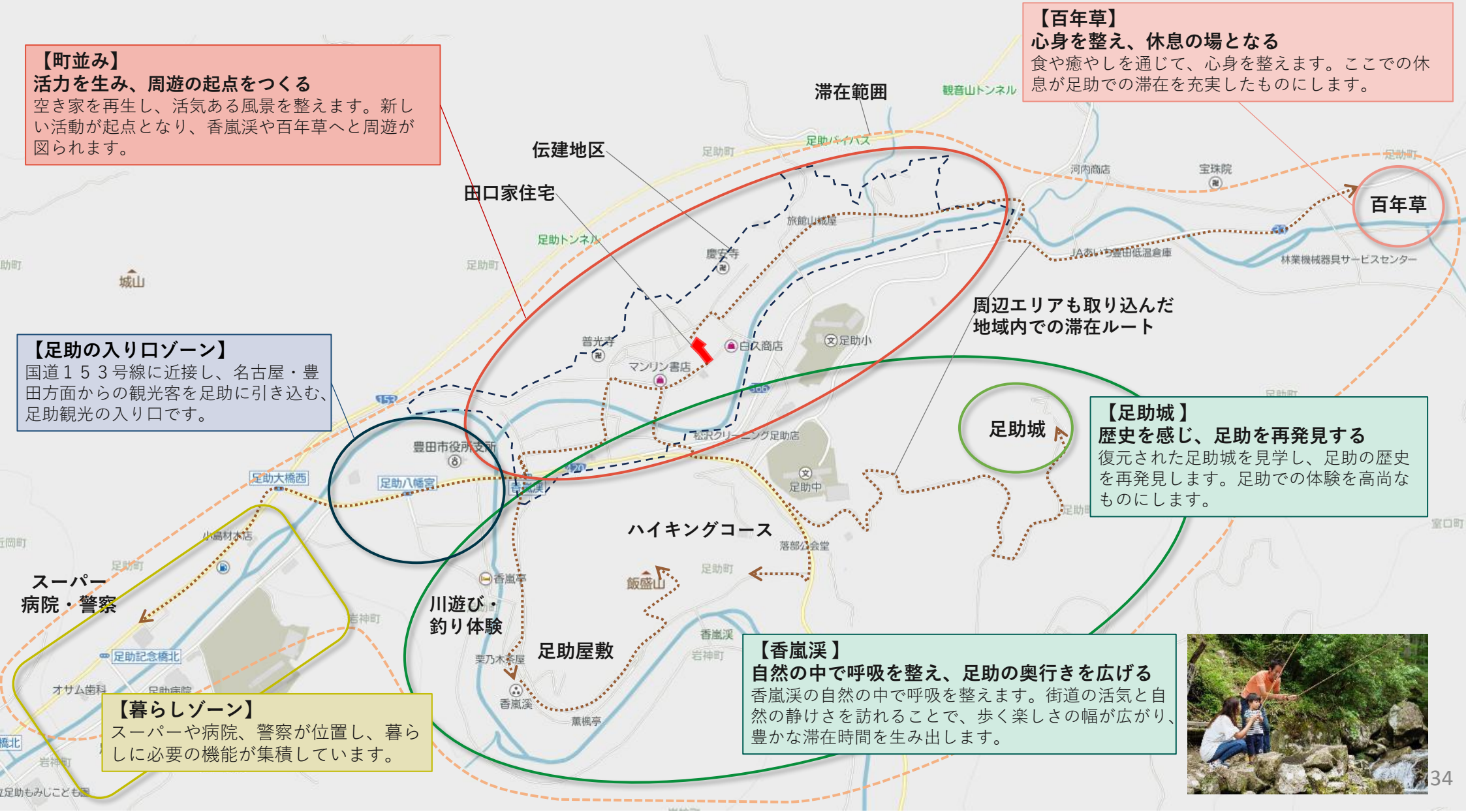
「足助直し」が息づくまち
新しい価値が生まれる創造の場であり
人と人　時と時がいい塩梅に混ざりあう　豊かなまち　足助

第４章　未来への設計図
２　町並みの活用イメージ

（1）広域エリア活用イメージ

足助の町並みを核として空き家・空き店舗の活用や観光コンテンツ作りを行い、加えて香嵐渓や百年草、各ゾーンを含む滞在範囲内の周遊のため、地域資源の魅力化及び連携を通じて通年型・滞在型観光を推進します。

また、「足助直し」を軸に連携することで、暮らす人も訪れる人も、心と体が整う、持続可能なツーリズムの形を目指します。



（2）町並みエリア活用イメージ

町並みに次世代を呼び込み、新たな商売や暮らしがあるまちを整えます。空き家を活用し、街道沿いを中心にした活気と、裏通りの静けさを創ることで、地域住民も観光客も過ごしやすく、歩くほどに楽しいまちを目指します。

【暮らし機能】

「奥（オク）」の居住誘導ゾーン

◆ 役割：静かな暮らしを守る

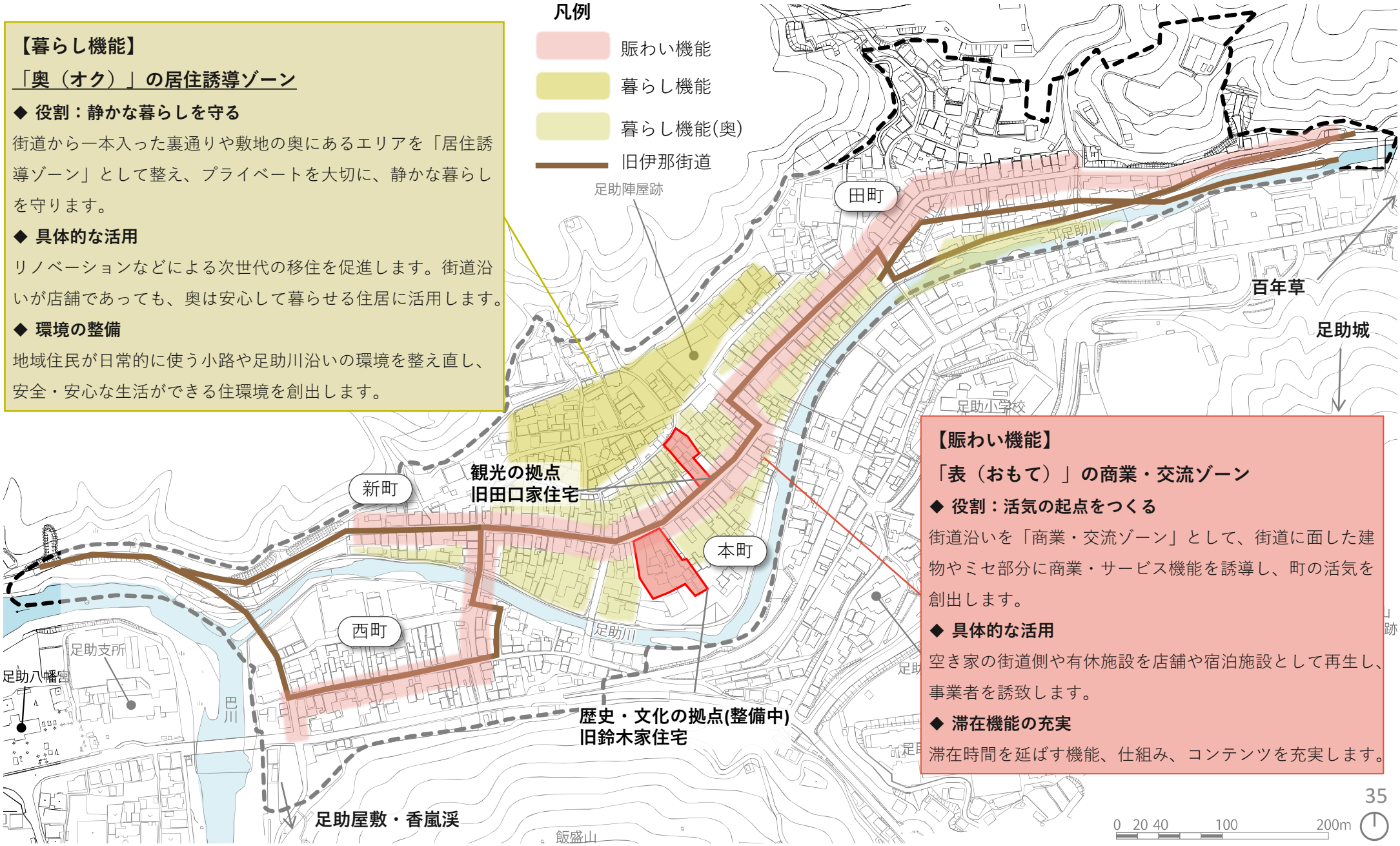
街道から一本入った裏通りや敷地の奥にあるエリアを「居住誘導ゾーン」として整え、プライベートを大切に、静かな暮らしを守ります。

◆ 具体的な活用

リノベーションなどによる次世代の移住を促進します。街道沿いが店舗であっても、奥は安心して暮らせる住居に活用します。

◆ 環境の整備

地域住民が日常的に使う小路や足助川沿いの環境を整え直し、安全・安心な生活ができる住環境を創出します。



【賑わい機能】

「表（おもて）」の商業・交流ゾーン

◆ 役割：活気の起点をつくる

街道沿いを「商業・交流ゾーン」として、街道に面した建物やミセ部分に商業・サービス機能を誘導し、町の活気を創出します。

◆ 具体的な活用

空き家の街道側や有休施設を店舗や宿泊施設として再生し、事業者を誘致します。

◆ 滞在機能の充実

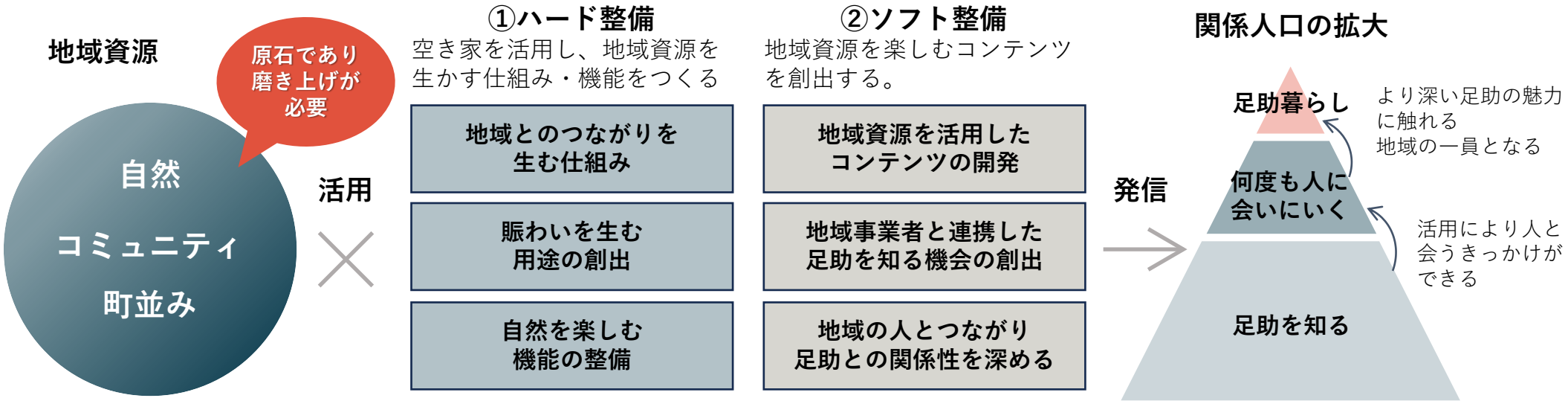
滞在時間を延ばす機能、仕組み、コンテンツを充実します。

（3）地域が一体となった「足助直し」の取組

「足助直し」の取組は、誰か一人が頑張るのではなく、**地域が一体となり力を合わせて持続**さてていくものです。
下の図は、地域資源を活用してハードとソフトの両面で新しい賑わいを生み出して、発信し、足助に深く関わる人を増やしていくことを示しています。
私たちが目指すのは、一過性のイベントで終わらない、**未来にむけて、足助の暮らしが続くためのまちづくり**です。

足助直しの取組

ハード整備とソフト整備の組み合わせにより課題解決のソリューションとなります。
① 歴史的建造物を活用し、**地域資源を生かす機能・仕組み**を挿入します。
② **資源を楽しむコンテンツを造成**することで、新たな足助の魅力を創出します。



- **町並みのにぎわい用途の創出により、観光客や地域住民が歩いて楽しむまちとなる。**
- **香嵐渓などを周遊することで足助を楽しむ方法を知り、新たな足助の魅力を発見する。**
- **地域とのつながりで足助に何度も行く動機ができ、関係人口を拡大させる。**

（4）ハード整備のイメージ

①ハード整備の方法	空き家・空き店舗を活用し、地域資源を生かす機能・仕組みをつくる

地域とのつながりを生む仕組み


コンシェルジュを配置したホテルフロント


つくり手の見えるお店・体験


お試し移住・長期滞在可能な部屋

賑わいを生む用途の創出


多世代が気軽に立ち寄れる飲食店


コワーキングスペース


旅行者も地域の人も使える物販店

自然を楽しむ機能の整備


自然を体感できるサウナへ


地元の食材を生かしたレストラン


川を体感できる遊歩道の魅力化

（5）ソフト整備のイメージ

ソフト整備の方法	地域全体で連携して、地域資源を楽しむコンテンツを創出する

地域資源を活用したコンテンツの開発


川沿いの夜間ライトアップ


古民家を活用したアートイベント


空き家を活用したマルシェの開催

地域事業者と連携した足助を知る機会を創出


案内人と町並みを歩くツアー


連携店舗で使える地域パス


地域の施設と連携したものづくり体験

地域の人とつながり足助との関係性を深める


たんころりんの製作体験


足助まつりの山車の曳手となる


何度も通うきっかけをつくる

（6）活用推進イメージ

町並み活用のロードマップ

- Phase 1として住民・観光客がともに楽しめるにぎわい機能を創出します。宿泊施設や飲食店など滞在の拠点となる機能に加え、地域のハブとなる用途を配置し、Phase 3で連携できる施設を増やしていきます。
- 町並みの空き家所有者や事業者、行政などが、町が変化する過程に応じて必要な機能を付加していきます。関係人口から移住に結びつけるため、Phase 2では移住に対応する施設の開発を行います。

Phase 1

地域のハブとなり、人と人をつなげる機能や賑わいをつくる施設ができる。

- 宿泊施設
- コワーキングスペース
- コンシェルジュ
- カフェ
- レストラン
- 物販店舗





Phase 2

足助暮らしを感じられ、移住促進につながる施設を設ける。

- 住宅
- セカンドハウス




Phase 3

足助の資源を最大限活用し、付加価値の高い施設をつくる。

- 温浴施設
- オーベルジュ
- シェアハウス




year 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

環境整備(予定)

町並み看板整備

遊歩道の照明整備

活用物件数
(イメージ)

その他

飲食店

宿泊(客室数)

（7）滞在イメージ

「足助直し」を感じる足助の滞在イメージ

足助の周遊マップを作製し、体験コンテンツを盛り込みます。

連携店舗では様々な特典を得ることができ、町並みや香嵐渓の自然を感じてリフレッシュする足助の旅を創ります。







1 宿泊・滞在施設

足助の魅力を教えてもらい、人とつながる地域の拠点。

どこか懐かしい古民家で暮らしを感じ、生活の知恵を学ぶ。

周遊マップイメージ



活用用途、コンテンツ事例



2 路地奥のギャラリー

江戸時代から変わらぬ路地の景観に時間の流れを感じる。ふと立ち寄るギャラリーで自分と向き合う時間に。



3 レストラン

地域の食材を生かした心が喜ぶディナーを満喫。

足助の食の豊かさに驚かされる。



4 香嵐渓散策

早朝の香嵐渓散策。自然の中で日常の疲れを洗い流し、心も体もリフレッシュ。



5 クラフト体験

三州足助屋敷で織物体験。山村の暮らしを支えた手仕事を体験し、今の暮らしを見直す機会に。



6 セレクトショップ

セレクトショップでオリジナルハーブソルトをお土産に。好みのハーブと塩を選び、特別な思い出になる。



7 百年草

丁寧な食を味わいながら山と川を感じながら休憩する。

第５章　具体的なアクション
１　事業イメージ

（1）事業者と空き家所有者のマッチング

空き家の増加は見られるが、不動産情報や空き家バンクに掲載されないことも多く、実際に事業を行いたい事業者と結びつきにくい現状があります。

事業者と空き家のマッチングイベントなどを通じて、空き家活用のハードルを下げ、活用を促進します。

情報の収集・シェア

- 空き家情報を収集し、借りたい人とのマッチングを行う。
- 空き家相談会や見学会を開催する。





マッチング促進のイベント

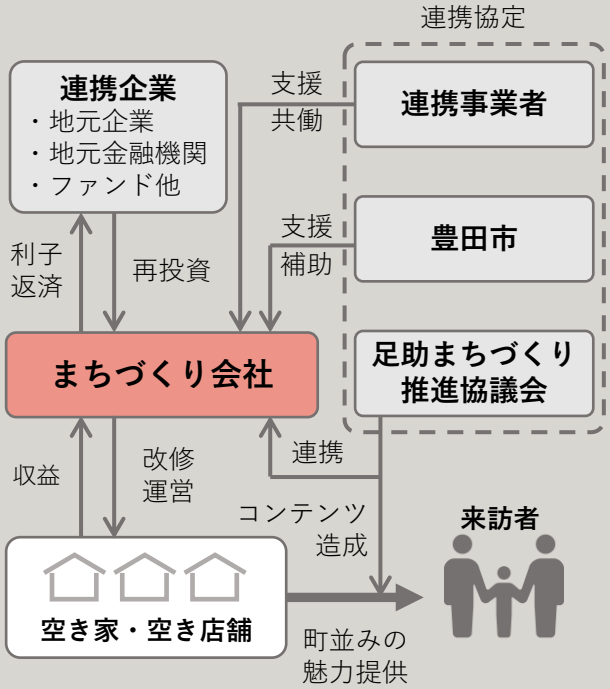
- 空き家マルシェ等のイベントを開催し、期間限定で空き家に出店するようなトライアルを行う。





開発をサポートする まちづくり会社の組成

- 古民家改修や運営のノウハウを持つ専門事業者と、地元の事業者が出資するまちづくり会社を組成する。



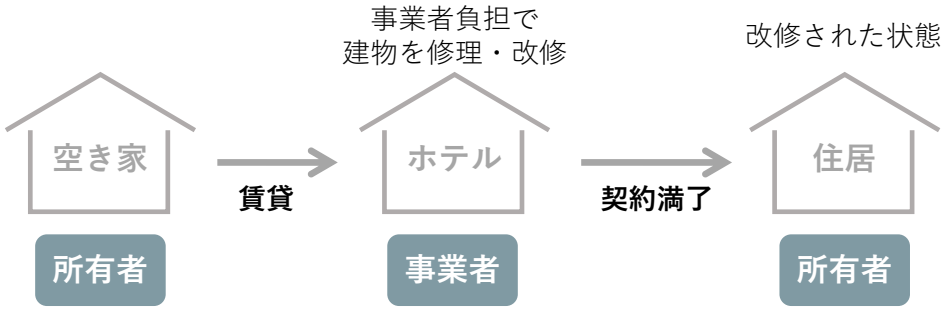
（2）空き家・空き店舗の活用の促進

「建物は直したいけれど、先祖代々のものも大切にしたい。」

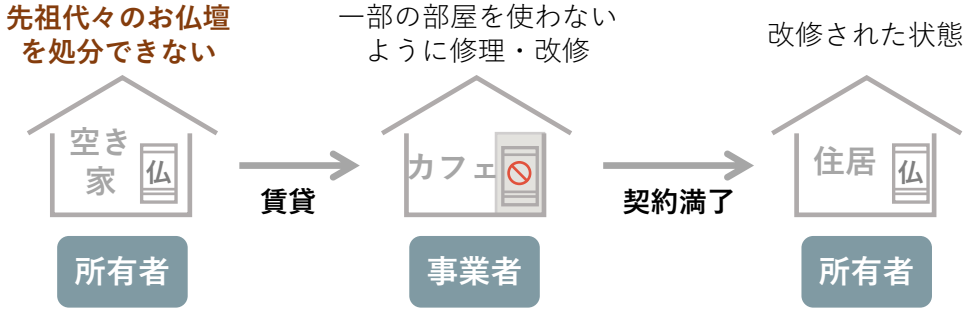
所有者の想いに寄り添うのが、「足助直し」古民家活用スタイルです。建物を一律に作り変えるのではなく、残したい場所や守りたい暮らしの範囲に合わせ、無理のない形で建物を守っていきます。

●空き家・空き店舗の活用の方法

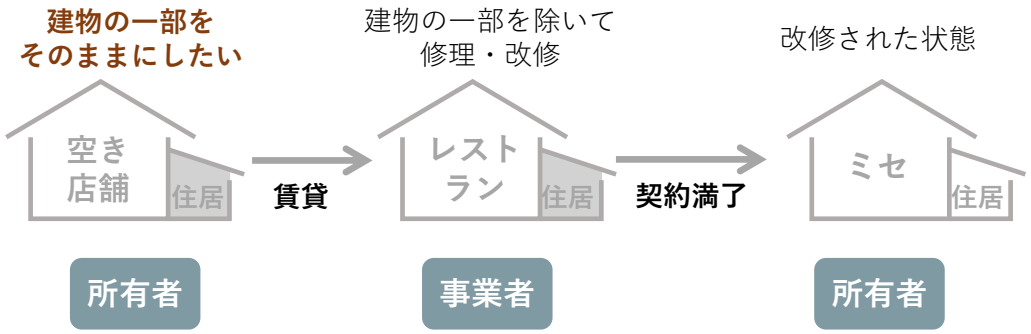
【事例１：建物を丸ごと「足助直し」して次世代へ】



【事例２：思い出をそのままに、一部を「足助直し」】



【事例３：暮らしを守りながら、表通りを「足助直し」】



改修前の例



改修後の例



【建物全体が空き家となっているケース】

事業者が改修費を負担し、建物の傷んだ箇所を直します。一定期間ホテルや店舗として活用した後は、価値が高まった状態で所有者へお返しする、資産の再生サイクルです。

【お仏壇や大切な荷物があり、片付けが難しいケース】

お仏壇のある部屋や大切な蔵はそのままに、使っていない部屋だけを直して活用します。動かせないものを無理に動かさず、今の状態を尊重したまま、建物に新しい風を吹き込みます。

【奥で生活しているが、街道沿いの「ミセ」が空いているケース】

街道に面した「ミセ」の部分だけを店舗として直し、奥の居住スペースとの境界を整えます。プライバシーをしっかり守りながら、かつての町並みの賑わいを再現します。

第５章　具体的なアクション
２　施設の活用イメージ

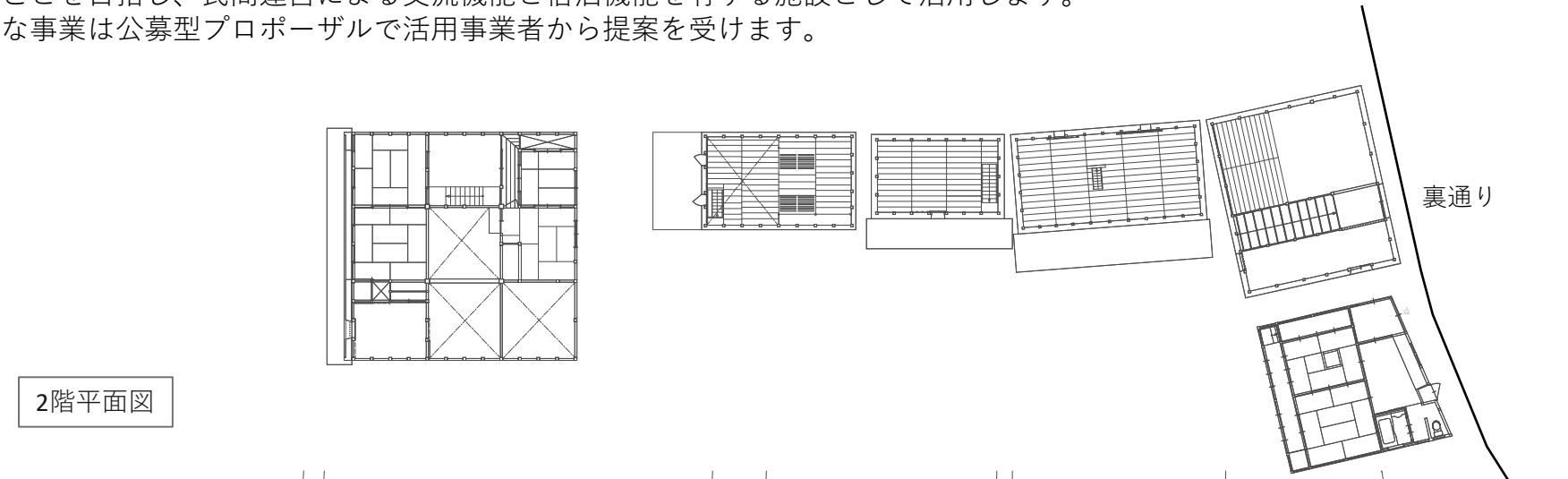
（1）田口家住宅活用イメージ

「足助直し」による、建物の繋ぎ方

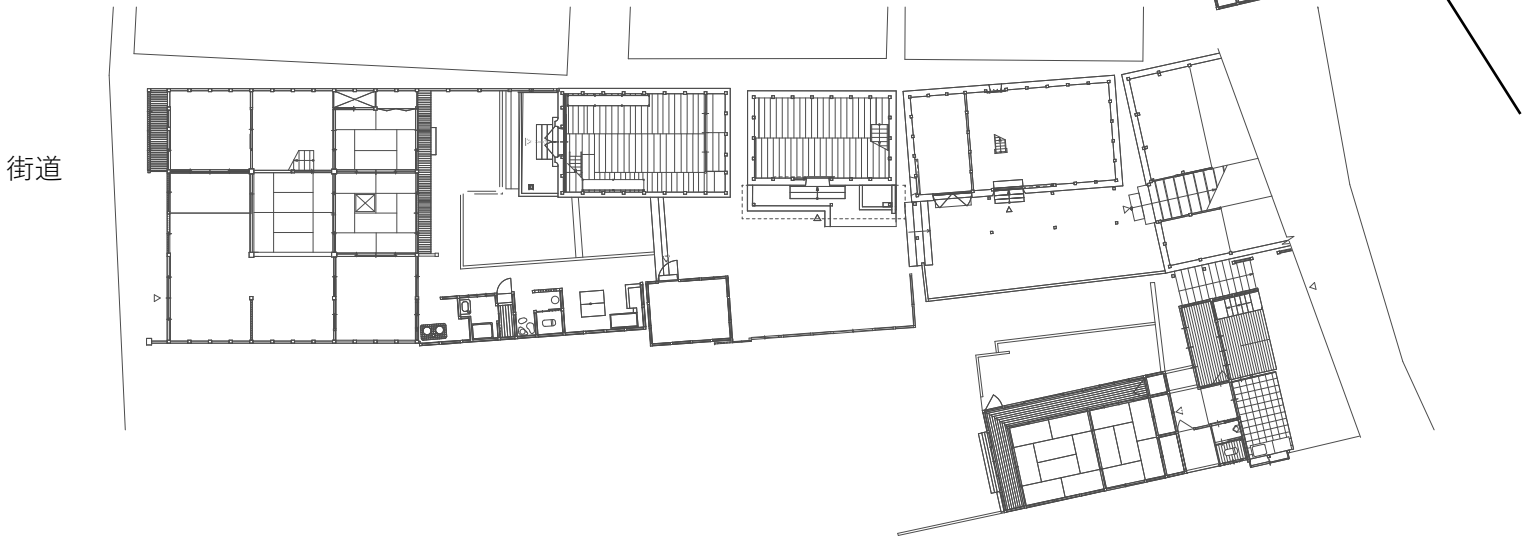
長い年月、足助の町並みを守り続けてきた建物。その建ち姿の美しさを尊重しながら、現代の暮らしや商いに適した機能を持たせることで、100年先へ繋いでいくための活用のイメージを紹介します。

■ 田口家住宅活用イメージ「賑わいの再構築」

田口家は、町並みの中心部にある大規模な商家です。重厚な店構えと奥行きのある空間を活かし、再び町の人や来訪者が集う『賑わいの核』として足助直しを施します。歴史的な意匠はそのままに、地域の新たな拠点となって関係人口を創出し、地域活性化や観光振興につながることを目指し、民間運営による交流機能と宿泊機能を有する施設として活用します。
詳細な事業は公募型プロポーザルで活用事業者から提案を受けます。



2階平面図



1階平面図